かあさん日記

立花泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
かあさん日記

【Ｎコード】
Ｎ１１９８Ｋ

【作者名】
立花泉

【あらすじ】
四コマ漫画ならぬ四コマ小説のイメージ（あくまでもイメージ）のショートストーリーです。テーマは主婦の日常。
実話をもとにしたフィクションです。

夢といえど

子供が４人いる同級生と、夫が浮気！

私と夫は１０歳違う。

私が上だ。

だから夫が浮気するとしたら、相手は年下だと思っていた。

同級生で、子供４人で、バツイチ。

なんじゃ、そりゃあ～。

許せん。

夫に宣告する。

「あの女のところに泊まったら、離婚よ」

夫が言う。

「仕方ないな」

制裁よん。

「子供に会わせないわ」

夫、泣く。

子供はダメで、私はいいんかい。

ショックだ。

「って、いう夢みたの～。お父さん、ダメねえ～」

2歳の娘、言う。

「ダメねぇ～」

私、言う。

「そうよねー」

娘、言う。

「そうそうそう」

「お母さん、ショックだよ～」

泣けてくる。

娘、ギュッ　と抱き締めてくれる。

温かい……。

「ありがとう、みったん」。

「ありがとー、母さん」

ちんちん

夫が、鬱気味となって久しい。

そんな夫を、

「ちんちんちんちん鈴木君」と呼んでいる。

前は、

「ちんちん鈴木君」だった。

このままいくと、

「ちんちんちんちんちんちんちんちんちん鈴木君」になるのだろうか。

「ちん」・・・・長いな。

娘に言ってみた。

「お父さん、ちんちんだって。どうしようか？」

娘は、お股をポンポン叩く。

「ちんちん」

イヤ・・・「ちん」は「ちん」でも、違うっす。

2歳児は、面白いな～。

そうだね、落ち込んでいてもしょうがない。

今日もみったんと元気です～。

2歳児と歌って踊る。

夫が言ってきた。

「おまえら、元気だな」

あいかわらず表情が暗い。

「一緒に沈んでいようか」

「・・・・いや、いい」

「心配せんでええよ。あなたが沈んでいるぶん、嫁と娘で浮かれてあげる。あなたは安心して、沈んどきいー」

「・・・・・・・・・・そりゃ、どうも」

、

朝

鬱気味の夫は、腹痛と共に朝を迎える。

「大丈夫ね？　病院行って、点滴する？」

無言の夫に、娘が聞いた。

「お父さん、お腹いたいの～？」

「ごめんね、みったん。お父さん、お腹が痛いんだ」

黙って、父親を見る娘。

これが、いつもの朝となって、どれくらい経つだろう。

酷いときは、「もう無理」「できない」「何もかも駄目」という台詞がつく。

仕事に関して、私は蚊帳の外だ。

会社人としての夫を知らない。

だから夫に、「しっかりしなさい」「頑張れ」「何とかなる」とか、

気休めや無責任ともとれる言葉は、かけきれない。

私が知っているのは、夫である彼、父親である彼、だ。

これなら、誰よりも一番、私が知っている。

「何もかも」という言葉が出たときは、

夫としての自分、父親としての自分も否定しているようで、怒りが沸く。

叱咤する。

夫として、父親として、駄目かどうか。

判断するのはあなたじゃない。

私と娘だ。

そして私と娘は、あなたに合格点をあげている。

いいわけ

夜、みったん寝ません。

「いいかげん、寝なさい！」

涙ぐむ、みったん。

そこまで怒った覚えがないので、驚く私。

「どうしたの～？　何で泣くの？」

「あのね、あのね。お父さん、お腹痛いって、思ったんだ」

「お父さんのこと、考えていたの？」

「うん」

そう言って、涙ぽろぽろ。

「お父さん、大丈夫だから、寝なさい」

2歳で、父親のことを気遣っているのかと、驚きと感動。

翌日。

みったん、朝ごはん食べません。

「ちゃんと、食べなさい！」

涙ぐむ、みったん。

「あのね、あのね。お父さん、お腹痛いって、思ったんだ」

「・・・・・・」

みったん、ボールペンを分解して遊ぶ。

「もう、バラバラにしないでって、言ってるでしょ」

涙ぐむ、みったん。

「あのね、あのね。お父さん、お腹痛いって、思ったんだ」

「・・・・・・」

みったん、絵本に落書きする。

「本に書いちゃ駄目。大事大事しなさい」

涙ぐむ、みったん。

「あのね、あのね。お父さん、お腹痛いって、思ったんだ」

「あのさ・・・お父さんと、どういう関係があるわけ？」

「・・・・・・。あーんぱーんまーん！！」

「はあ？」

それ以降、言わなくなったみったんです。

怖いのは誰だ

会社に向かった夫から、電話がかかってきた。
会社に着いたであろう間もない頃。
この時間に電話がかかってくるのは、初めてだ。
「どうした～？」
「すられた」
「何が？」
「財布。状況から考えて、だけど。今、警察で盗難届け中」
「スリ？」
「うん」
ＴＶでやってる。
ノンフィクションだけど、フィクションしか感じられなかった。
まさか、夫が被害者になるとは。
「ショックだよ～。何で俺ばっかり」
泣きそうである。

そうだ、夫は今、ちんちんちんちん鈴木君だった。

これ以上、ちん、を増やしてはいけない。

「仕方ないよ。事故だよ、事故」

「でもさー、凹むよ」

「野良犬にでも噛まれたと思いー」

「無理だよー」

「じゃ、猿は？　猿って、人の物、奪うよ～」

「……」

犬や猿じゃ駄目なのか？

じゃあ、猫かぁ～？　カラスかぁ～？

「とにかく、不可抗力だから。あなたに責任ないから。狙われたものは仕方がない」

「……今から銀行とか電話しないといけないから、切るね」

電話を切った夫。

大丈夫だろうか？

心配になる。

心配だ。

変に落ち込まないといいけれど。

「ちん」が増えたらどうしよう。

心配でたまらない。

けれど、

その一方で、

話のネタができたぞお～と、

話を練りはじめる自分って・・・。

持ってきたー

「ハサミ、持ってきて」

みったんに頼む。

2歳を過ぎた娘は、お手伝い大好き。

時として邪魔しているだけの娘だが、できるだけ頼むようにしている。

「は～い」

元気よく、ご機嫌麗しい声。

しかし、子供ってのは分からない。

いつも、みったんが使っているハサミを持ってくるかと思いきや。

ガサガサガサ。

この音は・・・。

引き出しの中を探っている模様。

方向からしてキッチン。

推測すると、調理用ハサミを探している模様。

調理用ハサミは、みったんが持つには大きすぎる。
いつも触らないよう注意し、きちんと守っているみったんなのだが。
注意しようかと思う。
いやいや、娘が自分で考えたゆえの行動なのだ。
持ってくるだけなら、危険はない。
ガサガサガサ。
まだ物色している。
時間がかかりすぎじゃないのか。
「ハサミ、まだ～？」
「は～い」
それから少し経って、みったん登場。
「お母さん、ハサミ、持ってきたー」
「あり・・が・・・・・・・・・とぅ」
みったんが差し出したもの。
「チョキ」

グー。
チョキ。
パー。

の、「チョキ」だった。

ああ、あたしの人

子供専門店に行った。

みったんにとっても、馴染みのあるお店。

ここへ来ると、我が物顔だ。

親の傍を平然と離れ、気に入った物を物色する。

親としては、商品を傷つけないかと、冷や汗ものだ。

だが、じっと親の傍に居させるのは、至難の技というもの。

みったん以外にも、同じ事をしている男の子を発見。

みったんと同じくらいか、1つ上といった感じか。

意気投合したらしく、2人で玩具を物色する。

ぴったりと寄り添う様は、小さな恋人みたいだ。

悲しいかな?

どんなに仲良くなろうと、親の都合で呆気なく終わるのが、子供の性。

買物が終わった母親に手を引かれ、店を出る男の子。

心なしかみったん寂しそうと思ったが、

それは親の感傷にすぎないらしい。

何事もなかったように、玩具を手にして物色する娘。

子供専門店を出て、古本屋へ行く。

親が本好きなせいか、本屋に行くと、テンションがあがる娘。

児童コーナーに行くと、

おや？

先ほどの男の子？

みったんと私、立ち読みしている男の子の後ろ姿を凝視。

違う。

恰好は似ているが、背丈が全然違う。

こちらが、高い。

顔は…完全に別人だ。

そうだよね～、そんな偶然ないよね～。

「みったん、人違いだよ」

と言うとして、

遅かった。

後ろから抱きつく、みったん。

男の子の、驚く声がこだました。

ちん、会社休む

自律神経失調症。

と書かれた、診断書を差し出す夫。

自律神経？

鬱じゃなく？

と思ったが、原因はストレスだし、文面は気にしないことにする。

問題は、会社に提出しないといけないほど、病状が悪くなっている

ということ。

生活、どうしょうか？

考える私に、

「これ、会社に出すか迷っている」という夫。

こりゃ、何を迷うねん。

この後の及んで、尻込みかい？

「働きたい・・・」

「できるの？」

「・・・・・・。」

「とりあえず、これは会社に提出。そして上司と相談。後は、それから。いいね？」

頷く夫。

出勤の朝。

起きてこない夫。

「分かっているけど、身体が動かないよぉ～」と、泣き声。

求職、確定かな？

とりあえず好きにさせておく。

やっと起きて、昼近くに会社に向った。

夕方頃、帰るメールが届く。

帰ってきた夫の表情は、朝と違い明るい。

「最長1ヵ月までの休み。結構、いるんだって」

こんな理由で休む人はいないと、過去に言っていた夫。

実は、仲間が少なくないと知っての、安堵だろうか？

とりあえず、

明日から、朝から晩まで、ずーと、夫がいる。

毎日いる・・・・。

毎日。

嬉しいな～。

毎日。

どうしようか・・・・。

奥様の心情は、複雑だ。

やれやれ

「お母様、と言ってみて」

「おかあさま」

痺れるっ。

凄くいい。

気持ちいいほどのくすぐり感が、たまんない。

ふと思いついて、言わせてみせた呼び名。

「母上」

「ははうえ」

「カカ様」

「かかさま」

うん、お母様がいい。

調子こいて、何度も言わせてみる。

最初は言ってくれたみったんだったが、厭きたのか言わなくなる。

つまらないな〜。

「おかあさん、お茶、ちょうーだい」

「お母様、お願い、って言ってくれたら持ってきてあげる」

「はあ？」

「お母様、お願いって、言ってみて」

「はあ？」

「いいから」

「はあ？」

「言わないと、持ってこないもんね」

拗ねる私。

「おかあさま、おねーたい」

「うん、うん、うん、持ってきてあげるね～」

満足心で、お茶を取りにいく。

その時。

「はあああああああーーーーーーーーーーーーー」

2歳児の、それはそれは長い、溜息が聞こえた。

いくつ

みったんが、聞いてきた。

「おかあさん、いくつ？」

「ん？・・・２０歳」

「おとうさーん、いくつ？」

お父さん、答える。

「２５」

「そっかー。おかあさん、いくつ？」

お父さんが、答える。

「３５」

「おかあさん、さんじゅうごおー」

「違う。お母さんは、にじゅうー」

「みったん、ふたつーぅ」

「おい、嘘、言うなよ。お母さんは３５だからね」

「違うよ。ハタチー、だよ」

困惑気味のみったん。

「嘘じゃないよ～。体重計が、そう言ってるもん」

苦笑いの夫。

「それ、代謝年齢だろう～」

「機械が２０歳言ってるから、２０歳でいいと」

だってさ～

「きつい」

「夜、眠れない」

の夫の言葉。

「ちんちん君だから？　だるだる君だから？」

「・・ダルダルって何よ？」

「だってぇ～」

ちんちんちん鈴木君（夫）の1日。

１４時起床。

食事。

昼寝、散歩&ネット。

食事。

ネット&ゲーム。

早朝、就寝。

というのが、定着しているような気がする・・・。

そのせいか、「ダルさ」。

「だるだる君」登場と、思ってしまう私。

夫の嘆きの声に、

「ちんちん君ですか？　だるだる君ですか？」と、

思わず聞いてしまう。

いけないかな・・・？

良くないかな・・・？

今頃かよ

みったんを寝かせつけるための、ドライブ、ブーブー。

夜のドライブが好きなみったんは、上機嫌。

空に浮かぶ月や星を見つけると、

ＮＨＫ子供番組『おかあさんと一緒』で流れる曲を歌う。

途中から、作詞作曲みったんに変わり、

その後は、えんえんとおしゃべり。

意味を把握できないまま、相槌だけはしっかりとする両親。

「・・・・・それでねーそれでねー、光がきてねーまぶしいーとおもったんだー」

「そうね」

「またー来たよー。くるまー、くるまー、危ないよー」

「あぶないねー」

「くるまー、ひかりー、くるよー、きらきらー、お月様、きらきらー。

みったん、と思ったんだー。おほしさまがねー、だって」

「あっ、ねこー！」

叫ぶ私。

「だってねー、そうなんだよー。ひかり、きらきら。

ひかり、いっぱい、だねー。おつきさま、きらきらー、おほしさま、きらきらー。

くるま、あぶないー、ひかってるー。お外、くらいー、って思ったんだー。

そうそうそうそう・・・・・・」

聞き取れないくらい、ブツブツ・・・・・といい始め。

「・・・・・・・・・・」

無言。

寝たのかな～？

「ねこぉ？　ねこ～！、どこぉ～いるの～？」

う～ん、危機かも？

毎日が、綱渡りをしている気分。

右に偏ることも、左に偏ることも、許されない。

鬱になった夫を支えてみて、思うこと・・・。

励ましの言葉も、叱咤の言葉も、

悪いほうへしかいかない。

普通だったら、何でもない言葉が、夫を追いやる。

普通だったら、こんな時もあるさ～で終わる事が、夫を追いやる。

私に元気がないと感じると、自分のせいだといって、さらに沈む。

生活のことを考えると、不眠になる。

感情のまま泣くと、娘が泣く。

そして、「ごめんね、お母さん」と言って謝る。

悪くないのに、自分の前で母親が泣くから、自分が悪いと思うのだろう。

周囲に泣きつく前に、周囲が嘆く。

「お願いします」という。

これじゃ、私は大丈夫だよとしか言いようがない。

恥っ

古本屋に行った時のこと。

相変わらずパタパタと店内を走るみったん。

叱っても、意味がわからないのか、関係ないと思っているのやら。

店内には、漫画本を立ち読みをしているお客さんが、あちらこちら。

隣にも。

私も立ち読みしていると、みったんの声が聞こえてきた。

「おかあさーん、どこ～」

パタパタパタ。

「あっ、ここかあ～」

「走らないでね」

「は～い」

パタパタパタ・・・何処かへ行く。

みったんの声が聞こえてくる。

「おかあさ～ん、どこ～」

「おかあさんー、どこー」

「おかあさん、どこかなー」

パタパタパタ。

近づいてくるみったん。

大丈夫そうだから無視する私。

パタパタパタ・・・。

パタ。

みったんが叫ぶ。

「おかあさまー、ヘイ、カモン～」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1198k/

かあさん日記

2010年10月11日04時37分発行